

# 住民発意型の景観形成活動に対する支援についての省察:山の辺の道・奈良道におけるみちづくりを通じて

山口 敬太<sup>1</sup>・片岡 由香<sup>2</sup>

<sup>1</sup>正会員 京都大学大学院工学研究科 助教 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1)

E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup>学生会員 京都大学大学院工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1)

E-mail: kataoka.yuka.48s@st.kyoto-u.ac.jp

きめ細やかでかつ実行力のある景観計画の策定のために、意欲のある地域住民をどのように支援するかは、地域景観形成における大きな課題である。山の辺の道・奈良道（奈良市）の沿道地域においては、住民団体が自ら、住民自主認定ルートの設定を進め、かつ市の補助を受けてルートマップや案内看板、道標の作成、フォトコンテストの実施などを行ってきた。筆者らはこれらの支援を行うとともに、住民発意型の景観基本計画策定へ向けた技術的支援を行っている。本稿は、この実践研究の途中経過報告であるとともに、住民発意型の景観形成活動の初期段階において有効な技術的支援のあり方について考察したものである。本実践においては、独自の問題設定として、住民の景観に対する価値や地域のあり方に対する価値の“顕在化”と“社会化”のプロセスに着目している。本稿では、特に、これまでの取り組みが価値の顕在化に果たした影響について省察し、その結果を整理した。

**Key Words :** 景観計画, 地区計画, まちづくり, 住民参加, マネジメント

## 1. 背景と目的

景観法施行後七年あまりが経過したが、全国的にみれば住民提案による景観計画の策定は未だ進んでいない<sup>1)</sup>。担い手の不在や合意形成の難しさなどが課題としてあるが、住民活動の支援システムが確立していないことも挙げられる。地域活動に対して意欲のある地域住民をどのように支援し、景観形成活動を促進し、きめ細やかでかつ実行力のある景観計画を推進するかは、地域景観計画における大きな課題である。一方で、その支援の方法を支える実践理論も求められている。

山の辺の道・奈良道（奈良市）の沿道地域においては、住民団体が自ら、住民自主認定ルートの設定を進め、かつ市の補助を受けてルートマップや案内看板、道標の作成、フォトコンテストの実施などを行ってきた。筆者らはこれらの支援を行うとともに、住民発意型の景観基本計画策定へ向けた技術的支援を行っている。そしてこれらの実践活動を通じて、自ら立てた景観形成の規範化に関する仮説的モデルを検証するとともに、実践理論構築のための課題発見を試みている。

本稿は、この取り組みの途中経過報告が主な目的であるが、住民主体の景観形成活動の初期段階における専門家による技術的支援の有効性についても省察したい。な

かでも、独自の問題設定として、住民の景観に対する価値や地域のあり方に対する価値の“顕在化”と“社会化”のプロセスに着目しており、これまでの取り組みが価値の顕在化に果たした影響についても考察する。

## 2. 山の辺の道・奈良道のみちづくりの経緯

### (1) 住民自主認定ルート選定まで

山の辺の道は、大和朝廷発祥時の街道の名残とされ、史蹟名勝に富む石上神宮から桜井（南道）にかけてはハイキングコースとしての整備も整い、多くのハイカーで賑わう。一方、石上神宮以北の道（奈良道）は、南道に比べて人に知られていなかった。その一つの要因として、北道がどの道か明確に定められていなかったことがある。桐村英一郎氏は、諸学説を検討した上で、古代の道を確定することは史料的制約から難しいとしたが<sup>2)</sup>、道の曖昧さが地域イメージの形成には不利にはたらいていた。

平成14年に旧制奈良中学校の同窓会により創立された自主的勉強会「青垣サロン」は、平成17年より公開講座「寧楽文化講座」を開催していたが、本講座において山の辺の道・北道の活性化が議論されるようになり、有志による現地踏査と研究報告会が行われていた。平成19年6月の同第20話において「山辺の道・北道を考える会」

の創立が発表される。折しも「日本風景街道まほろば」の事業が始まり、同年10月下旬には、青垣サロンの事務局長・今西宏氏ら幹事が、奈良県土木部道路建設課より、山の辺の道（南道）で活躍している民間グループと連携して山の辺の道の一本化を目指してほしいとの要請を受け、平成20年4月、白毫寺地域、東市地区、帯解地区、精華地区の各自治連合会会長と、同連合会に所属する各自治会会長、行政関係者ら62名が出席して「山の辺の道・北道を考える会」を創立した。自治連合会への呼びかけを行い、組織づくりに尽力したのは藤本忠彦氏である<sup>3)</sup>。

同会は、まずは東海自然歩道、歴史の道、奈良奥山ハイキングコースなどが併走している状況に対して、北道の本一本化を目指した。歴史に埋もれた北道のルートや、古老の言い伝えなどをもとに推定するとともに、自治会単位でルート原案を提示、隣接する自治会間で接合点の調整を行い、全長9350mにおよぶ住民の自主認定ルート案を確定した。本ルート案は、平成21年4月「山の辺の道「奈良道」を考える会（北道から改称）」（会員81名が出席）の承認を経て決定され、奈良市と奈良県に報告を行った<sup>4)</sup>。このルートには、私有林内の道や私有農地の田圃のあぜ道など、これまでにほとんどハイカーが通らなかった道も含まれている。さらに、ルートの確定後、奈良道から不動明王の祠に至る道が、山の所有者によって切り開かれて整備されるなど（傾斜地には間伐した木で階段が造られた）住民による道普請もみられた。

## (2) 道の案内、広報活動

同会は地域の歴史に関する講演会を重ねるとともに、平成22年度には、奈良市市民企画事業の助成（単年度150万円）を受け、案内地図の作成、道標や案内板の設置を行った。平成23年度には、フォトコンテストの開催、遠足会の実施、溜池堤におけるベンチや花壇の設置などを行った。フォトコンテストについては、応募点数336点、入選作品47点を選び、平成24年3月の6日間、奈良市写真美術館にて写真展を開催した。この運営は、すべて住民によって行われた。一方、万葉歌のイメージを活かした景観づくりに力を入れはじめ、11月の万葉の花研究家を講師として呼んでの勉強会、沿道に植樹用のなでしこの育成、万葉歌掲示用の木札の制作を開始した。平成24年度には、沿道で詠まれた歌の木札による掲示と、それに因んだ植物の植栽を行う計画が総会で発表された。

同会（「山の辺の道・奈良道を守る会」に改称、以下、守る会）は、沿道の草刈りや歩きやすい道の整備を進めるとともに、沿道の環境整備を住民自ら構想し、平成21年2月には自然植物公園や、古墳公園の構想について学識者との勉強会を開始、平成22年4月の同会の総会において、これらの事業の実施計画と、沿道の環境整備に関する調査研究項目が発表された。調査項目には、自然植

物園構想（藤原町と八島町の山、虚空蔵町）、黄金塚古墳公園（帯解地区）などが挙げられている。具体的に行政との協働で動いているのは、トイレの整備であり、この候補地の選定も、地権者との調整を含めて完了した。

### (3) 山の辺の道・奈良道を守る会との協働

#### a) マップ、道標、案内板の技術的支援

筆者（山口）は、平成21年4月から山の辺の道（南道）の形成過程の研究を進めていた関係から、山の辺の道・奈良道を守る会の活動を知り、平成22年3月に活動内容のヒアリングを行った。同会は「寧楽文化講座」の開催を通じて著名な歴史・地理の学識者との交流を深めていたが、景観・まちづくりの学識者との接触はなく、その場で筆者に助言・協力を願い、筆者も承諾した。

最初の協働作業はマップと道標、案内板のデザインであった。マップについて、筆者は蛇腹折りの形式の提案を含むデザインと、写真の提供を行った。背面の各見所の沿革や案内は、守る会の会員（会長など）自らが執筆した。同マップは現在までに3000部を発行した（2012.5.1現在）。道標と案内板は、守る会が費用を支出して、有志の大学院生が制作した。道標は実物大模型を用いて議論を重ね、コールテン鋼の道標11基と木製の簡易なものも含めて計25基、案内板は5基作成し、マップ千部と合わせて170万円強の予算で行った（写真-1）。

#### b) 景観調査の実施

一方で、守る会の当初の活動は、沿道の案内と宣伝が主であったが、次第に景観の保全・形成が重視されるようになった。筆者らは平成22年12月に守る会の幹部に対して景観まちづくり計画の素案を示した。これを受けて平成23年度4月の総会には、千田稔氏、早川和男氏とともに山口が呼ばれ、景観保全と地域の活性化について講演を行い、景観計画の意義や目的、手法などを伝えた。そして守る会の平成23年度事業に「景観の現状実態調査」が挙げられ、筆者らはその依頼を受け、平成23年5



写真-1 住民と協働で作成したマップ、案内板、道標

月に事業案「山の辺の道・奈良道における景観マスタープラン案の策定について」を提出した。

平成23年8月には「景観保全計画」の第一回打ち合わせが開催された。出席者は、守る会の会長や理事、四地区の自治連合会長、二地区の自治会長を含む16名であった。同打ち合わせでは筆者らが事前に配布した記述式アンケートをもとに、自治会単位で、各地区の課題の抽出をおこなった。

表-1 打ち合わせ（2011.8.21）における質問シートの項目

1 地域の方々が誇りに思うもの、次世代に守り継ぎたいもの
2 愛着のある場所、なじみのある風景
3 山の辺の道「奈良道」について、どういうイメージを大切にしたいか
4 地域や自治会単位での、解決すべき現状の課題（すぐに解決すべき／長い時間をかけて解決すべき）
5 地域の（もしくは自治会単位での）将来の目標像
6 そのために必要な取り組み（自分・自治会単位／地域全体／行政と協働）
7 景観保全の具体的な取り組みの可能性
8 山の辺の道「奈良道」の景観保全プランのあり方、使い方、進め方

まずは1-3の質問に関する議論の結果、今後の方針として、山の辺の道は「祈りの道、癒しの道」としての道の雰囲気醸成に努めることを沿道地区共通の課題として、相互に連携することの意識共有を図った。さらに、地域の課題として、

- ・ 伝統行事、神社や祠の管理などの地域活動の維持
- ・ 耕作放棄地の増加、田園風景の維持
- ・ 里山の荒廃
- ・ 資材置き場、農地転用の問題
- ・ 過疎地における廃屋の増加
- ・ 獣害防止柵の景観的配慮

などが、概ね沿道の地域共通の課題であることを確認し、これらの課題の共有を図った。そして、これらの問題が、従来の景観保護施策の枠組みでは解決できないこと、ボランティアの受け入れも含めて、住民による協働体制の構築が不可欠なことを確認した<sup>9)</sup>。なかでも、高齢化の問題も含め、地域活動の担い手の育成は重要な課題として挙げられた。本会の議論の内容は、平成23年11月の秋期講演会において、副会長の藤本氏より「麗し景観残そう未来へ」と題する講演の中で発表された。

その後、複数の住民との交流を通じて、住民の景観や場所に対する価値観の固有性に関心を持った筆者らは、住民の主観的な環境評価のあり方について明らかにするため、山の辺の道奈良道を守る会の全面的な協力のもと、沿道地域の長期居住者ら160名を対象として“大切な場所”に関するヒアリングや詳細な記述型アンケートを実施した。この詳細については別稿に譲るが、このヒア

リングによって、長期居住者（主に70、80歳代の高齢者）の記憶が蘇り、子供の頃に遊んだ竹細工で孫と遊んだり（岡田氏）、里山を何とか再生したいという声が上がったという（守る会副会長、藤本氏の弁）。

### 3. 景観価値の顕在化と社会化に関する省察

#### (1) 省察の枠組み設定

景観まちづくりの実践においては、様々な状況への対応と、明確な目標設定が必要となる。また、景観価値の共有から保全・形成の合意形成へ至るまでには様々な段階があり、関係主体の協力や、景観に対する意識が高くなければ、その後の進展は難しい。

筆者らは、守る会の活動の支援を行いながら、住民らによる組織と事業の運営を客観的に観察することを試みていたが、事業が進むにつれて、議論の枠組みの提案者としての役割が求められるなど、実践主体となることが避けられなくなった。そこで、景観価値の規範化という実践に対する省察のフレームワークとして、景観価値の顕在化・社会化という仮説的モデルを設定<sup>9)</sup>し、実践者としての参画を試みることにした（図-1）。

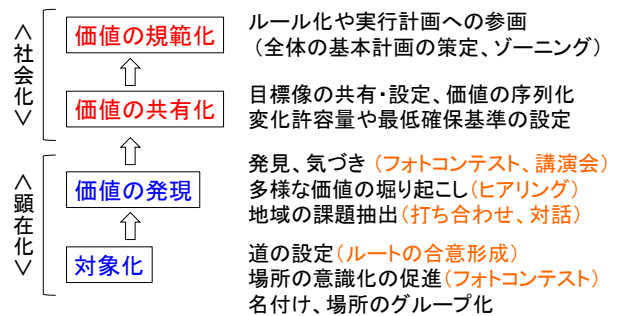


図-1 景観価値の規範化に関する仮説的モデル

景観価値の顕在化とは、景観の対象化、個人的価値の発見、価値の明確化などの住民による景観評価の各段階を意味する。価値の社会化とは、価値の内面化を意味し、価値の共有ならびにルール化や実行計画への参画など、価値の規範化を含む。本取り組みでは、景観価値の顕在化を経た規範化を最終的な目標としているが、本稿では現在までの取り組みを振り返り、景観価値の顕在化について考察を試みる。

#### (2) 景観価値の顕在化

##### a) 景観の対象化

自らが住む地域の景観に対して積極的な評価を行うためには、その景観を対象化する必要があると考える。本対象事例の場合、ルートを選定が最初の対象化のきっかけとなった。道そのものが「古道」という歴史的立場づ

けとイメージを有しており、沿道地域イメージの形成上重要な意義を果たしたと推察する。

そもそも各地区の自治会長らは沿道景観の保全形成以上に、各自治地区の耕作放棄地や山林の荒廃に関心が高かった。これらの沿道の自治会ごとの課題を抽出し、沿道の景観の課題として整理し、沿道地域共通の課題とすることで、自治会の活動と沿道の景観の議論を結び付けることができた。この問題のフレームワークの拡大により、地域の様々な問題解決を結びつけた景観の保全・形成という大きな目標を設定する土壌が整いつつある<sup>7)</sup>。

#### b) 景観価値の発現

守る会は、毎年少なくとも二度の講演会を実施しており、その多くが山の辺の道などの地元の歴史に関するものである。講師陣には歴史・地理の著名な専門家が名を連ねる。まず、この勉強会が地域の景観認識の基盤にあることを確認したい。

しかし、当初守る会は、観光客を迎えての地域活性化を目指しており、沿道の「景観」は議論の対象となることが少なかったように思う。筆者らとの議論を通じて、守る会のなかで「景観を守り育てる」ことの意識が徐々に育てられ、景観保全計画の第一回打ち合わせにおいては、古道の雰囲気を守り育てることが最も基本的な目標として掲げられるに至った。そして、祈りや癒しを与える心の景観を大事にしようと、地元代表者（藤本氏）が講演で訴えるに至った。これと平行して、守る会は平成23年度事業ではフォトコンテストを実施し「孫に残したい」風景の写真を募るなど、より多くの住民への景観の意識化や価値の発現に対するはたらきかけを行った<sup>8)</sup>。

筆者らによる“大切な場所”のヒアリングやアンケートなどは、景観に対する「記憶」や潜在的な価値意識を掘り起こすことを目的としており、これにより価値意識の発意とその共有を期待した。一方で、言語や概念によって表現の難しい精神的景観や暮らしの価値の掘り起こしつつ、感覚の共有を図ること、対話の場を設けることが、今後の課題として挙げられる。

#### (3) 景観価値の社会化

対話に基づく価値共有や合意形成の前段階として、対話が可能な社会集団を形成する必要がある。守る会の幹事団は、主に旧制奈良中学の同窓会と、自治会という2つの既存の社会集団から成っている。実際の地域活動は自治会ベースで行われており、これまでの守る会の活動

がうまく機能したのは、既存の自治会をうまく活用しつつ、自治連合会間の連携に成功したからにほかならない。一方、守る会では、事業の実施主体を4つの部会に分けて<sup>9)</sup>活動を進めているが、これまでのように自治会の役員だけが動くのではなく、守る会と自治会が発信者となって、地域づくりの担い手となる新たな人材を引き出し、育成する必要性が生じている。まずは、花の植栽活動などがその契機となることを期待している。

#### 4. まとめ

本稿では、山の辺の道・奈良道の沿道地域にける住民自主認定ルートの設定、宣伝・広報活動、景観保全の取り組みの経緯を整理した。また、景観保全形成活動の実践の省察にあたり、景観価値の顕在化と社会化という概念設定を行い、顕在化について考察を行った。考察の内容は以下の通りである。ルートの設定は、古道を対象化し、沿道の各自治区の地域活動の連携と、課題の共有に寄与した。景観の保全形成という考え方は、各地域の固有の問題を含みながら、沿道の地域共通の課題となった。フォトコンテストの実施や、調査に伴うヒアリング・アンケート活動については、記憶の掘り起こしや景観価値の発現への効果が期待できるが、これについては今後の検証が待たれる。

#### 注・参考文献

- 1) 景観協定の認可は全国で21件に過ぎない（平24.3.1）。
- 2) 朝日新聞 2007.5.11付、桐村英一郎「影媛 山の辺の道「北道」を探る」
- 3) 山の辺の道・奈良道に関する資料は以下の通りである。  
・今西宏、「山の辺の道「奈良道」について」、2009  
・山の辺の道「奈良道」を守る会 通常総会議事次第 平成22, 23, 24年度分（総会には毎回90名前後が参加）
- 4) 産経新聞夕刊 2009.6.5付
- 5) 山の辺の道「奈良道」景観保全計画打合せ会 議事録
- 6) 風景経験を意識化、集団での価値共有、集団での実践、の三段階の構造で捉える考えに基づく。（山口敬太：風土論に基づいた景観の計画・運営の理論と実践に関する試行的考察，土木計画学研究発表会 44，2011）
- 7)ただし、その基盤として、共同作業を通じた信頼関係の構築があったこと、研究活動を通じての地域の歴史学習などがあったことを挙げておきたい。
- 8) 平成21年5月の寧楽文化講座第33話において、藤原昭奈良市長のほか、早川和男氏が講演を行った。その際の早川氏の講演内容がきっかけであるという
- 9) 環境整備、写真展、遠足誘致、萬葉の集い、の4部

## A Study on the Support System of Local Activities on Community-based Landscape Planning: The Case of Yamanobe-no-michi Nara-michi Footpath

Keita YAMAGUCHI, Yuka KATAOKA